

(対象事業：1. 地域の中核館として他館や他機関等と連携して行なう事業)

事業名：千葉アートネットワーク・プロジェクト2004

事業者名：千葉アートネットワーク・プロジェクト実行委員会

連携事業館名：千葉大学芸術学研究室、千葉大学普遍科目「文化をつくる」、佐倉市立美術館、千葉市美術館、川村記念美術館、千葉県立美術館、千葉市認可心身障害者通所施設「ワークホーム里山の仲間たち」、特定非営利活動法人千葉まちづくりサポートセンター、特定非営利活動法人まちづくり千葉

住所：千葉市稲毛区弥生町1-33 千葉大学教育

学部内芸術学研究室

TEL：043-290-2658

FAX：043-290-2658

HPアドレス：<http://www.e.chiba-u.jp/wi-can/>

① 施設概要

千葉アートネットワーク・プロジェクト実行委員会は千葉大学芸術学研究室、その所属学生、千葉大学普遍科目「文化をつくる」受講生等の学生、及び千葉市内の2NP0、千葉市認可の福祉施設、佐倉市立美術館、千葉市美術館、川村記念美術館、千葉県立美術館等の美術館からなる組織である。千葉大学に事務局をおき、諸団体と連携して活動を行っている。

② 事業の意図目的

本プロジェクトはアートによって様々な対象をつなぎ、その対象が持つ諸問題と向き合い、解決に向けて活動を行うことを目的としている。2004年度は参加した各美術館とその周辺地域が持つ様々な問題の解消に取り組み、美術館とまちがより親密に交流できることを目的として、またその美術館同士、まち同士、そこに住む人同士等、複数の段階の対象をネットワークし、交流をはかれることを目的として活動した。

③ 事業概要

佐倉市立美術館、川村記念美術館、千葉市美術館、千葉県立美術館、ワークホーム「里山の仲間たち」の各施設及び周辺地域で、それぞれの場所特性に合致する講師を招いてのワークショップ・プログラムを行った。(詳細はドキュメント・ポスター参照のこと) またその各地域をネットワーク化する手段として10月10日～24日のWi-CAN two weeks 中にツアーバスを運行。バス内でもワークショップ講師によるパフォーマンスを行った。

10月10日から24日にわたり、千葉市美術館さや堂ホールで「Wi-CAN station」と名づけ、成果・経過の展示を行った。また23日にはパネリストを招いてのWi-CAN2004を概括するシンポジウムやレセプション等も開催した。

④ 事業の製作物及び報告書等

事業の製作物 テキスト ワークシート その他(ポスター、各サイトのリーフレット)

作成した報告書等

ビデオ (マダンTv)

冊子 (Wi-CAN2004ドキュメント)

その他 ()

⑤ 参加者状況

参加者人数 延べ 1000人

内 訳 各美術館プログラム：560人 バス乗車人数：40人
ドキュメント展示：400人

(1) 事業の実施状況について

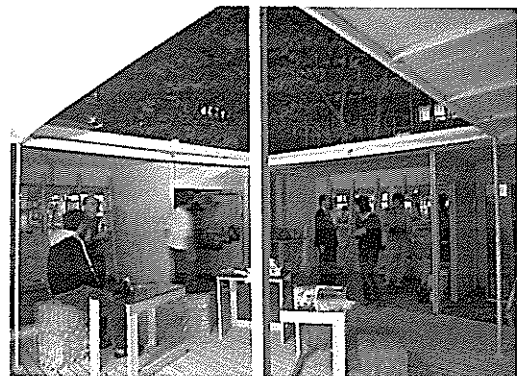
千葉アートネットワーク・プロジェクト 2004 は「Art*Arch*Reach 一架構する〈いま・ここ〉」と題し、2003 年度までに千葉市美術館を含めた諸団体とともに形成した「千葉アートネットワーク」に加え、新たに佐倉市立美術館、川村記念美術館、千葉県立美術館を迎えた 4 館からなる「美術館ネットワーク」を構築することを目指した。このネットワークは 2 つの側面をもった。1 つは各美術館が独自の展開をしながらも、千葉アートネットワークの中に位置づく事で互いに交流し連携する「美術館同士のネットワーク」、もうひとつは各美術館がその周辺地域と企画を展開することで、美術館と地域住民を結びつける「地域とのネットワーク」である。美術館と周辺地域とが共に行う企画としてサイト・プロジェクト、そしてサイト・プロジェクトを繋げる企画として全体連携企画を行った。2004 年 10 月 10 日～24 日までをプロジェクトを対外的に紹介する期間「Wi-CAN two week」として位置づけ、各企画を集中して行った。

○サイト・プロジェクト

佐倉・新町／佐倉市立美術館サイトでは美術館と商店街の関係をフラットにし、これまで感じられてきた交流の難しさを解消することを目的に、また市民参加と商店街—美術館の導線作りを目的に講師として藤原靖子氏を迎え「佐倉新町 show 店街」を行った。藤原氏が各商店にインタビューし、その交流の中から作品を制作し、完成した作品を美術館と各商店内にまぎれるように展示した。さらにマップの載ったパンフレットに作品を見るごとに各商店の作品シールを貼っていく「カタログ・スタンプラリー」も行った。

佐倉・弥富／川村記念美術館サイト企画「YALDAS : Yatomi Arts and Lives for Detection's Associational System」が対象とした弥富地区は古い町並みと現代美術、西洋美術を扱う川村記念美術館が存在する地域である。今回は建築家ユニット、アトリエ・ワン氏を迎え、美術館と住民が今後も深い結びつきを持つこと、美術館とともに自然豊かな周辺の環境を楽しんでもらうための民宿「弥富ン宿」を作った。民家自体には特に大きな加工はせず、掃除と少しの工事をする事で民宿として復元させた。またアトリエ・ワンが QR コードを基に浴衣と寝具をデザインした。関連プログラムとして落花生ワークショップや川村記念美術館庭園でのジャズコンサートも行った。

千葉・中央／千葉市美術館サイトで行った「千葉★中央アートプロジェクト」は千葉の中央地区と栄町を対象とした。近年、両地区共に人離れが進んでおり中央地区の中央銀座商店街では中心市街地再開発に伴い数店舗が移転や閉店を余儀なくされ、栄町は多くの韓国人が住み始めるなど、共にコミュニティの変容を迎えていた。この度の企画では中村政人氏、コマンド N をお招きし、これらまちを再認識し芸術拠点を形成する企画を行った。中村氏は MR（積水ハイムが 1970 年代に作った工業化住宅）を用いた「メタユニット__MR プロジェクト」を行った。周辺商店街の数店舗に出店して頂き、MR 内に仮想的に商店街を作り、希望者には商品の販売を行った。また、コマンド N のメンバーそれぞれが千葉・中央を舞台にした映像作品を作り発表する「マダン Tv__千葉中央」も行



MR 内部の様子

った。映像作品はお店や駅前のモニター、野外上映会にて上映した。

千葉・里山／千葉市美術館サイトでは「身体表現ワークショップーみんなで踊れば怖くない」と題し、コンテポラリーダンサーである山田うん氏を迎えたダンスワークショップによって地域福祉基盤の形成、地域住民の交流を目指した。2004 年度では計 6 回のワークショップを踊り、最終日を公開とした。回を重ねるごとにお互いになれ少しづつ体が動くようになり、始めは腕しか動かなかった人が、体全体を動かすような光景も見られた。またこの企画は千葉市美術館のアウトリーチプログラムの一環としても行われ、このことを象徴する企画として美術館ツアーも行われた。

○全体連携企画

サイト・プロジェクトを来場者に見てもらうため、また美術館と美術館をつなぐ「美術館ネットワーク」を可視化する企画としてコネクション・バス「Wi-CAN 号」が「Wi-CAN two weeks」中に 3 日間走った。千葉市佐倉市内の 4 美術館を巡回するバス、シンポジウムや「身体表現ワークショップ」に向けたバス、パフォーマンス集団である劇団上田が車内でパフォーマンスをするバスなどが走った。



劇団上田のパフォーマンス

改造した自転車で様々な場所（佐倉市美術館の周辺や、弥富地区のお祭り、千葉でのイベント）に赴きカフェを行う「チャリカフェ」はプロジェクトの広報として、また地域住民とのコミュニケーションツールとして活躍した。「Wi-CAN Station2004」は千葉市美術館一階のさや堂ホールに本年度のプロジェクトに関する資料（藤原氏の作品制作風景やダンスワークショップの VTR、「弥富ン宿」一部の再現、高校生が制作したマップ）を一堂に集め展示することで、各サイトへの関心を深めるインフォメーションセンターとなることを狙った。プロジェクトのハイライトとしてシンポジウム「まちから／まちへ アート・コネクション美術館」が行われた。第 1 部「千葉アート／美術館ネットワーク」では担当した学生による各プロジェクト紹介の後、各美術館学芸員との議論が行われ、第 2 部「輻輳する〈いま・ここ〉アート・コネクション」では塚本由晴氏（アトリエ・ワン）、中村政人（美術家）、勅使河原純（世田谷美術館学芸部長）、村田真（美術批評家）、宮城潤（NPO 前島アートセンター理事長）を迎えて「スキマ」に注目したアート展開について議論された。

（2）地域との連携について

ネットワーク組織である千葉アートネットワーク・プロジェクト実行委員会には美術館に加えまちづくり NPO、福祉団体、大学、市民が主催に参加しているが、各企画は地域の団体や住民との共同により実現された。佐倉・新町／佐倉市立美術館サイト「佐倉新町 show 店街」を開催するにあたり、佐倉商工会議所と協力関係を結んだ。各商店の方は藤原氏の作品作りから設置に至る過程に参加した。佐倉・弥富／川村記念美術館サイト「YALDAS」では地域住民から空屋が無償で提供されることで「弥富ン宿」が実現した。弥富地区の風土や歴史を知る過程では地域の方がまちを案内してくださり、お祭りにも参加させて頂いた。千葉・中央／千葉市美術館サイト「千葉★中央アートプロジェクト」では中央銀座商店街振興組合と協力関係を結び、千葉県商店街地域連携モデル事

業の助成を頂いた。「メタユニット_MR プロジェクト」では中央銀座商店街だけではなく、さらに周辺の千葉銀座商店街、栄町商店街から出品頂いた。「マダン TV_千葉中央」では栄町の空き地を野外上映会用に無償で貸して頂き、千葉・中央地区の数店舗のモニターにも映像作品を上映した。千葉・里山/千葉市美術館「身体表現ワークショップ」では社会福祉法人千葉県身体障害者福祉事業団千葉県千葉リハビリテーションセンターと協力関係を結び、ワークショップは全てセンター内の講堂で行われた。ワークショップにはセンター通所者、「ワークホーム里山の仲間たち」通所者、地域の養護学校生徒、市民等が参加した。チャリカフェの出動では千葉市、佐倉市内の様々な方にお声をかけて頂いた。お茶は「佐倉新町 show 店街」に参加したお茶屋さんより提供された。この他、プロジェクトの様々な場面で地域の方に尽力頂いた。

(3) 成果物について

「佐倉新町 show 店街」によって藤原氏の作品が 12 点（シートベルト、エキサイト、亀シール、かこ時計、レッスン&レッスン、エッジエッグ、インブラ、ジャパニーズソウル、佐倉茶んす、インターネットホットライン、すぐそば、アイ♥ ナショナル）完成した。「YALDAS」では期間限定であったがアトリエ・ワンを主導に「弥富ン宿」が作られた。「千葉★中央アートプロジェクト」では「マダン TV_千葉中央」の映像作品が VHS に収録された。チャリカフェ 2004 が学生メンバーによって作られた。また、2004 年度のプロジェクトの全貌をドキュメント冊子にまとめた。

(4) 参加者の反応（ドキュメント冊子から抜粋）

○「佐倉新町 show 店街」に参加商店からの声

「せっかく地域に美術館があり、そこに人が集まるのであれば、その人々がまちに流れることは商店としてはたいへんうれしいことです。今後はまちに共存するものとして、お互いのメリットを生かし、利用し協力しあってまちを活性化させていきたいと思っています。」（大木屋）「結果として直接売り上げにはつながりませんでしたが、佐倉の町並みを宣伝するのに役に立ったかと思います。」（大和電気）



藤原靖子氏と商店の方

○「YALDAS」に参加して

「昔からの農村で目新しいことが少ない地元坂戸区にとってもいい刺激になったのではないか。これからも何か機会があればできる限りの協力をしたいと思う。」（林区長）

○「千葉★中央アートプロジェクト」に参加して

「まちは変わっていきますが、心の中に今までの素敵な思いが残れば良いとの思いが強い学生の皆様のお陰で気持ちよく再開発事業と共に閉店することができました。」（コドモヤ糸店）

○「身体表現ワークショップーみんなで踊ればこわくない」に参加して

「私達は、このワークショップで、自分の心の赴くままに動き、表現し『心と体のリラクゼーション』を体感しました。そして、居合わせた人と手を繋ぎ、同じ音楽で動きながらコミュニケーション出来たことで、目には見えない素敵な贈り物を受け取ることができました。」（足立百代 泉谷中学校養育学級担任）

（５）芸術拠点形成事業を実施したことによる効果

本年度本事業を実施したことによる効果は以下の通りと思われる。

2004年度の企画では、里山サイトの同じコミュニティで暮す障害者と健常者が参加したワークショップや、千葉中央での韓国人が多く住む商店街と、日本人が多く住む商店街の関係作りのプロジェクトなど、いわゆる「マイノリティ」への目線を十分踏まえての拠点作りを積極的行えた。Wi-CANが当初から持っている「つなぐ」という概念には、元来このような通常言われる「マイノリティとマジョリティ」をつなぐ活動も含まれているが、本事業に参加したことでよりそれが強調され、意識して活動できた。そしてこの活動により、ごく僅かの広がりではあるが、これらの地域の持つ問題（健常者／障害者の暮らす地域間の断絶・日本人／外国人という地域分断）を示し、解決を図るきっかけ作りとしての機能を果たせた。

また佐倉市の二地域で行った商店街や美術館近隣に住む住民と美術館との関係に焦点を当てた企画では、マイノリティに限らず「まちの人」という対象、「アートに普段関心がなく暮らしているひと」というものの一部である「そこに住むまちのひと」と美術館の関係作りを狙った。そしてこの活動は「アートに関心がない」多くの人に向かってやはり「アートを親しみやすくする」という意味を持つと思われる。本事業への参加によりWi-CANに関わる学生や、マイノリティを含むそのまちのひとはアーティストを中心に展示活動ではない、その地域の場所性、つまりその場所が持つ地域特性や問題に特化された、そして誰もが参加できるプロジェクトを中心となって担っていくことができた。

以上のことから、本事業に参加したことで美術館と周囲との関係作りのための、まちへの芸術拠点形成、「マイノリティーマジョリティ」といった言葉で括られる地域間問題解決のためにアートを利用してのきっかけ作りという効果が得られた。どちらの活動も現在次年度に向けて引き続き活動中であり、そこからも大いに意義を得られたと考えられる。



ダンス・ワークショップの様子



弥富ン宿内部